

「おそるべし『巻頭言』」

主任司祭 晴佐久昌英

「いしずえ」の原稿締め切り日が近づくと、いしずえ編集部員が皆申し合わせたように、とある中国人の名前を口に始める。

「神父様、そろそろ『かんとうげん』をよろしくおねがいします」

「あの一、『かんとうげん』はまだですか」

また来たか。毎月耳にする謎の中国人、「かん・とうげん」。よろしくと言われても。まだですかと言われても。一体そいつは誰なのか。

もしや、あの「漢・桃源」か？ いや、漢は中国大陸の原風景から一步も出られないはず。

まさか、政治家の「菅・逃滅」？ 名前通り政権を逃し議席を減らした菅が何の用だ？

違う。あいつだ。あいつに違いない。あらゆる危機を乗り越えて、歴代のいかなる主任司祭をも支配し、常に「いしずえ」の巻頭を守り続けてきた男、その名も「巻・頭言」！

今号で、「いしずえ」がついに五百号を迎えた。心から祝福し、関係者のご奉仕に感謝したい。

月刊で五百号というのがいかにすごいことか、編集をした事がある人なら分かるはずだ。企画会議から始まり、原稿収集、記事執筆、編集校正、印刷発注、各戸配布に至るまで、細心の注意と忍耐のいる仕事である。編集部員たちが夜遅くまで、間違いを防ぐために一字一句を読み合わせしている姿には、頭が下がる。そうして一号を作るだけでも果てしない苦勞と犠牲があるというのに、それが五百回。

しかし、どれほど苦勞多くとも、その苦勞の実りの美しさはどうだろう。一見地味な教会報ではあるけれども、それがきちんと発行され、各地区の各家庭にもれなく届けられることが、この教会を見えない鉄筋のように支えているのである。「いしずえ」によって救われた、受洗した、という人だって大勢いるはずだ。

わがまま神父に毎月巻頭言を書かせるのが、いかに大変か、しかし、そんな地道な努力の積み重ねのおかげで、どれほど高円寺教会が発展してきたか、現に見よ、今回五百号目にも、編集部執念の催促の成果実って、見事に巻頭に現れたではないか。おそるべし、巻・頭言。